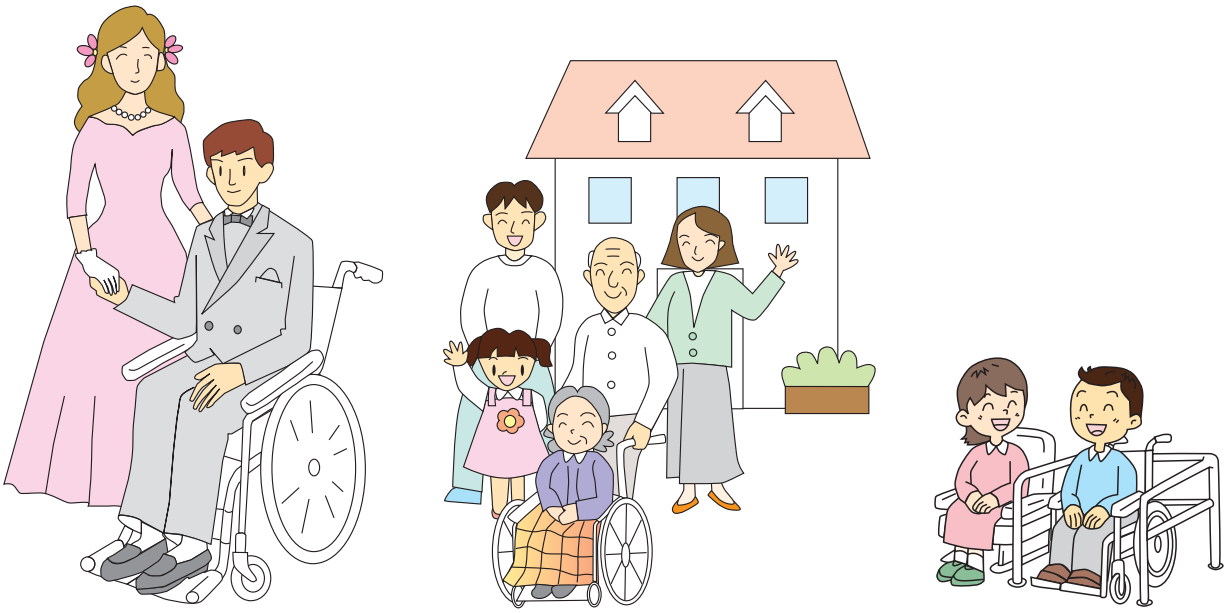
コミー物語シリーズ

THE STORY OF KOMY

車いす人生の物語



私たちは車いす生活をいかに知らないか？

―― 4 人の物語で初めて知ったこと ――

お恥ずかしい話だが、公共施設のエレベータには何故大きなミラーが付いているかよく分からなかった。気くばりミラーのメーカーになってみてはじめて「車いすは 4 輪車なので内部でのＵターンは大変。だからバックのまま出るときはミラーが必要」と分かった。コミーには車いすの人に役立つ商品もある。一人でもユーザーである車いすの人から直接話を聞きたかった。

そんな時、ある勉強会で、いつもきちんとした服装をした車いすで来る若者「マサ」と出会った。話を聞いてみると、明るく、面白く意表を突く驚きの連続であった。「マサ」の車いす人生は私の全く知らない世界だった。

コミーには「売ってくれるお客様」と「使ってくれるお客様（ユーザー）」がいるが、「マサ」は後者の大切なお客様であった。おかげでどんなミラーなら車いす生活に役立てるかを知ることができた。

文中で紹介した 4 人の話を聞いて、私たちはいかに車いす生活を知らなかったかということが分かった。私たちもいつかは車いす生活になるかもしれないのに……。

＜小宮山 記＞

コミーの物語宣言

コミーは「共に喜びを味わえる物語」を創るために仕事をしていきます。

コミーは 1973 年に設立。
おかげ様でコミーの「気くばりミラー」は “身近なコンビニ・ATM から航空機まで”
の広い分野でお役に立つことができました。これは

コミーの商品なら「買ってみよう、使ってみよう」
コミーなら「取引してみよう」
コミーなら「本音を言ってやろう」「知恵を貸してやろう」

などの出会いから、継続していただいている方々のおかげです。
しかし、たくさんの失敗もありました。
コミーでは仕事が終わって忘れた頃、またしつこく

「なぜ、あのとき失敗したか？」
「どんな出会いがあり、誰のおかげだった？」
「まだやりかけではないか？」
「また一つ勉強になったぞ！！」

など「？」「！」を話し合ってきました。
そしてできたのがコミー物語シリーズです。
一般に生物が育つには「DNA 要因」と「環境要因」と「時間要因」がありますが、
企業も同じだと思います。
コミーの DNA は “出会いの喜び” “創る喜び” “信頼の喜び” だと思います。
この喜びをもっと深くみつめ、これからもコミーが生きる「環境要因」と「時間要因」
を考えていこうと思います。
共に喜びを味わえる物語を創るために、知恵を出し合いませんか？
または一緒に仕事をしませんか？
そして社会や次の世代に役立てる商品づくりや物語ができればと思います。

とはいうものの、自分達の姿はなかなか分からないものです。
これからもアドバイス等よろしくお願いいたします。

コミー株式会社
代表取締役 小宮山 栄

コミーの物語シリーズ

ご希望の方にお送りしております。お気軽にご連絡ください。

HP ホームページに掲載中　冊 紙 小冊子または印刷物
小さな 小冊子「小さな会社の物語」に収録

新商品・新マーケット

マーケットが先か、
モノづくりが先か…

不思議３鏡態(きょうだい)物語 小さな
凸の子　(長男 コミー生まれ)
凹の子　(次男 養子)
平らの子(三男 コミー生まれ)

「ラミ」開発物語 HP 小さな
シンプルなデザインと
ネーミングは難産の末
生まれた

航空業界参入物語 HP 冊
種を蒔き、芽が出て
実になるまでのナガーイ話

中小企業とモノづくり論

モノづくりとオリジナリティの楽しみ

「日本一の中小企業」との出会い HP 小さな
おかげさまでミラーの
メーカーになれました

「モノづくり屋自慢」 冊
モノづくり屋はモノが
いつまでも残るので
ごまかせない。
そこから恥や誇りを
身につけるには？
(日刊工業新聞連載)
HP会社案内より
メディア掲載記事に有

新社屋建築物語 HP 冊
工場と営業を一つに!!
畳の部屋やバルコニーを
なぜつくったか

社会問題

社会問題を解決すればビジネスにもつながる

「万引問題物語」 HP 冊
「万引問題は捕まえた人に
聞け!」「役に立たないなら
売るな 役立っているなら
大きく叫べ!!」

車いす人生の物語 HP 冊
我々は車いす生活を
いかに知らないか？

生産システム

良い商品をムダなく
安定供給できる
システムを目指して

「デルに学んだ物語」 HP 小さな
「デルの革命」の本から
SCMを学び実行してみたら…

「納期約束改善の物語」
(作成中)

「ＩＳＯ取得の物語」 HP 小さな
- ISO9001短期取得物語
- ISO14001(環境 作成中)
- JIS Q 9100(2008年取得予定)
(作成中)

「掃除と分類」物語 HP 冊
整理力は仕事力!!
日本的「掃除」と欧米的「分類」
からSSを学ぶ

広告・広報 展示会

何が出来るか、何者か？
一言で言えば何か？

社名ロゴ変更物語 HP 小さな
- komyが出来るまで
- komyからKomyMirror
への変更(作成中)

ユーロショップ出展記 小さな
零細企業コミーが外国の
展示会に初めて出展

語呂合わせ物語 HP 小さな
代表電話　御社にこれ!!コミー
048-250-5311
ができるまで

はったり写真づくりの物語 紙
「超一流人と零細企業主が
一緒に写真が撮れた!!」
しかし…。

「日経新聞全面広告」物語 紙
念には念を入れた広告
早速、朝読んでいた人を
観察したらコミーのページを飛ばされてしまった
「何故？」

何をつくっている会社ですか？

昔、「松下電器は何をつくっている会社ですか？」と聞かれ、松下幸之助は答えたそうです。
「うちは人をつくっている会社です」と。
また、総理大臣の吉田茂は「総理。あなたはいつも何を食べていますか？」と聞かれ、
「人を喰っている」と。
最近、ある大学のインターンシップの発表懇談会で学長から
「コミーさんは何をつくっていますか？」と聞かれ、偉大な二人を真似て答えました。
「物語を創っている会社です」　「？？？」

車いす人生の物語

目　次

マサとの出会い　＜小宮山 記＞ 3

私たちは車いす生活をいかに知らないか？　＜小宮山 記＞ 4

車いすでも楽しい一人旅「サンタフェ旅行記」＜マサ 記＞ 6

アリゾナで車いすでの乗馬体験記　＜マサ 記＞ 9

アメリカでは「バックから乗れ!!」と誘導してくれました。
「何故だと思いますか？」＜マサ 談＞ 12

いすの上にも３年 ――――――
当初は恐怖の連続でしたが、最近は花を楽しめるようになりました　＜山田 福壽 記＞ 13

いのちへの対話『露の身ながら』より 14
　どんなに不便でも見苦しくても、どこへでも出て行く　＜多田 富雄＞
　車椅子に乗るときはおしゃれをして乗ります　＜柳澤 桂子＞

車いすの視点から何を学ぶか？　＜小宮山 記＞ 17

マサとの出会い　<小宮山 記>

マサとの出会いは、多摩大学 北矢行男教授が主催するソシオ・ビジネス研究会であった。

その時の講師であったマサの話は「高校時代に車いす生活となり、日本の大学を卒業した後、単独で渡米し、３年間のアメリカでの生活体験、そして帰国後の生活」であった。わかりやすく面白い話であった。
講演の後、マサに「今の話、面白かった。本に書けないだろうか？」と話をした。
その後、しばらくの期間、マサは研究会を欠席していたが、また研究会に出席し始めた。
何度か会話を交わしていくうちに、以前聞いたマサの話の内容はすっかり忘れてしまっていたことに気づいた。
思い切って「うちの会社へ遊びに来ないか？」と聞いてみたところ、二つ返事で「是非！」という返事をもらった。

最近ではバリアフリー対策として各駅にエレベータやエスカレータがつくようになった。
おかげで当社の車いす用ミラーも製造、販売できるようになった。
しかし、このミラーを使った最終ユーザーからの意見は全く聞いたことがなかった。
商品は「売ってくれる人」「決めて、お金を出してくれる人」がいて、最後に「現場で使ってくれる人」と流れるのだが、メーカーは最終ユーザーの意見が一番大事だということを痛感している。
看板業をしていたころ、ある人が凸面鏡をただで置いていった。その凸面鏡と、以前、貰ったモーターとを組み合わせて回転する鏡を作ってみた。
面白いディスプレイだと感じ展示会に出してみたところ、大量に購入する人がいた。
その後、お店を訪ねてみたら「万引防止に効果あり」という話で、当社は気くばりミラーのメーカーになったといういきさつがある。

マサに会社へ来てもらおう。日時を約束し、西川口駅近くにある事務所まで来てもらうことにした。
少し話をして、ビールでも飲みながら食事でもと考えてみた。

さて、西川口で電車を降りたらどのように来るか？
ホームから登る階段に車いすで利用できるエスカレータがついているが、これが使えるだろうか？（当時はエレベータがついていなかった。）それを利用し、改札口を出たら、最近できたエレベータがある。
そこには、当社のミラーもついている。どのように彼は使うのだろうか？
駅から会社まで３～４分。そして事務所は２階。車いすで階段を上り下りするには、４人いれば可能である。

そして次の問題はトイレだ。車いす生活にとってトイレの場所は特に重要。
インターネットで車いす利用者が食事とトイレができるところを探す。
なんと当社から青木公園（徒歩 15 分くらい）まで行かなくてはならない。
マサに確認すると電車でなくて車で来るという。車にどう乗り降りするのだろう。
そういえば、マサはアメリカで車で一人旅をしていたという。
結局、コミーの近くへ来たところでマサから携帯で連絡をもらい、私たちが外へ出て４人で２階まで車いすを持ち上げた。
コミーまで車でどうやってきたのかといったことや、普段の生活についてなど２時間ほど話を聞いた。
その後、川口駅前のリリア（多目的市民ホール）まで車で移動し食事をした。ここには車いす利用者でも使用可能なトイレ、レストラン、駐車場があった。

この日、私たちは車いす生活のさまざまな知識を得ることになった。

私たちは車いす生活を
いかに知らないか？　＜小宮山 記＞

●あなたはこの問題にいくつ答えられるだろうか？

Q1. 車いすの車輪はいくつありますか？
（2つだろうか？　3つだろうか？
4つだろうか？　あるいは？）

Q2. 障害者用トイレは何故あんなに広いと思いますか？

Q3. 車いすを使っている人で自動車免許を持っている人がいます。
どんな車でどのように車いすから乗り降りすると思いますか？

Q4. エレベータの中の正面または上部にミラーがついています。
どんな時に使うと思いますか？

Q5. バリアフリー、ユニバーサルデザインという言葉の意味を説明できますか？

Q6. 難問!!　マサはアメリカで「エレベータにはバックをしながら乗り込め」といわれたそうです。
何故？

※答えは 12 ページにあります。

お恥ずかしい話、私自身、つい最近まで Q4 と Q5 以外は答えられなかった。

コミーの若い社員に「車いすは何輪車か？」と質問したら「二輪車です」と答え、そのような絵を描いた。これをマサに話すと「四輪車ですよ」とムッとしながら答えた。 そうかといって、知らないものは知らないのだから仕方がない。
我が島国ニッポンは、今までは「異質なものを排除する」という国民性があった。 しかし、国際化と共に「異質なものから学ぶ」国民性に変わっていかねばならない。 国際化とは個性化であり、個性がなければ日本のある業界のように滅びていくと思う。

今、私たちは車いすを他人事のように思っているが、これからは個性ある車いす生活から学ばなくてはならない。自分が車いす生活になったらどうなるかも考えなくてはならない。車いすを理解するには自分が体験してみるのが一番早い。

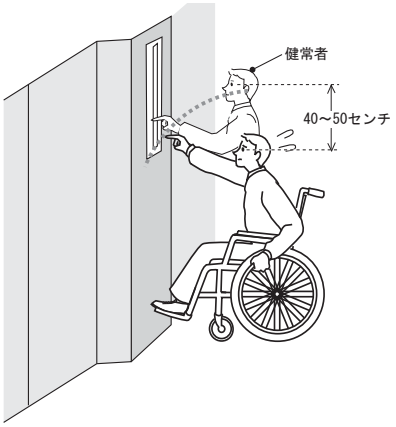
川口市長も川口駅前で体験してみたところ、問題点がたくさんあったという。しかし市長の場合はまわりが知っている人ばかり…。知らない人の中で車いすで移動したらどうなるのだろうか？義務教育では車いす体験を取り入れているだろうか？全く知らない人の視線の中で 1 日でも一人で車いす体験をすれば、キレる子供は少なくなるのではないかと思う。

●マサの車いすは「手漕ぎの四輪車」だった

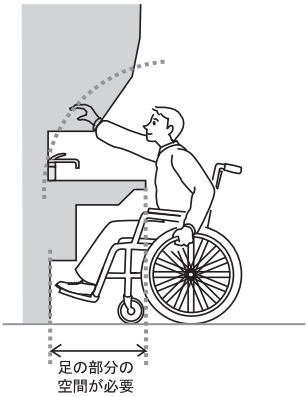
私自身、車いす体験はないが、マサの話を聞いてやっと結論が出た。

A：手の届く高さが 40 ～ 50 センチ低い

● ボタンに手が届かないエレベータもまだたくさんある

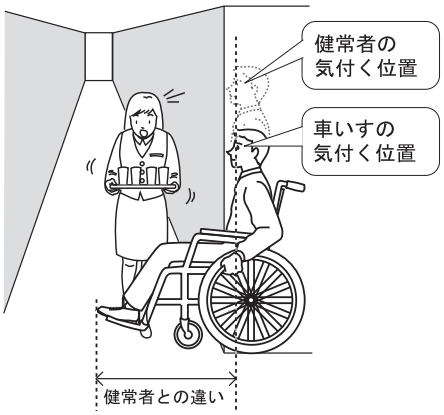


● 台所等では設計と配慮が必要

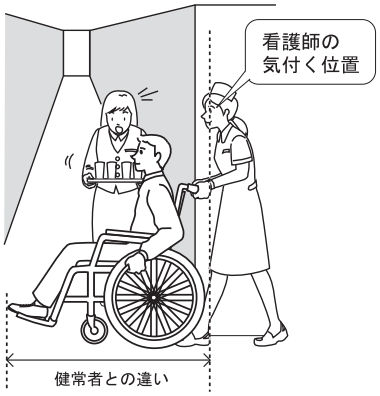


B：顔より足が前方に出っ張っているので、ぶつかりやすい。ミラーが必要

●１人の時



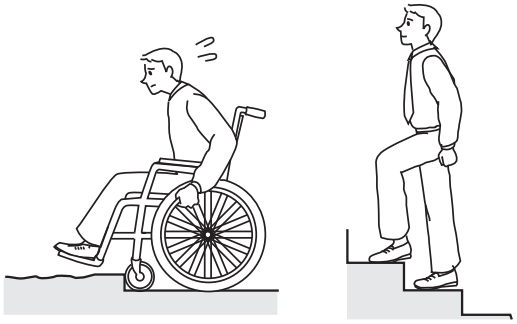
●介助者がいる時も



C：階段を上れず、5 ミリの段差でも乗り越えるのが大変、デコボコ道は強い振動、転倒もある

● 転倒した時は１人で起きあがれない

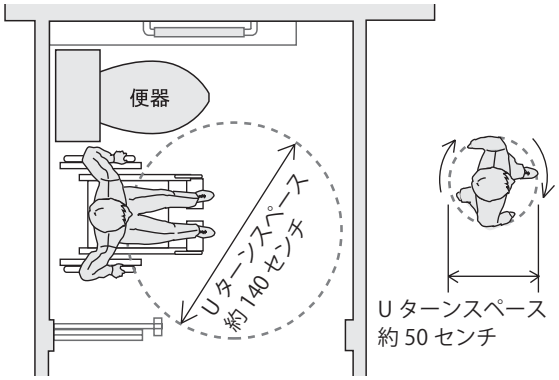
● ヨーロッパの石畳や日本の社寺の玉砂利などの走行は大変



車いす　　健常者

D：U ターンするのに広いスペースが必要 車いす使用者は便器に移るのが大変

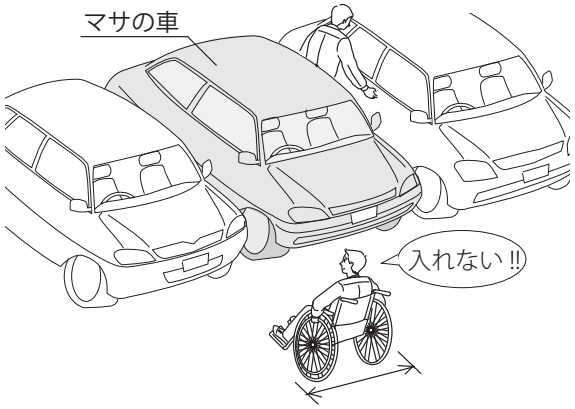
●「車いす用トイレに入ろうとしたら、物が置かれていて困った」



車いす　　健常者

E：90 センチ以下の狭い通路は通れない

●「車いす用マークがついているのに・・・。警察に電話しようか？」



駐車場での乗降は
約 120 センチ必要

車いすでも楽しい一人旅
「サンタフェ旅行記」 <マサ 記>

アメリカ留学中の話である。

朝、7 時 30 分の飛行機に乗るため、5 時に起床。準備を簡単に済ませ、アパートを出発。

空港に着き、不安ながら初めてインターネットで予約したチケットを無事受取り、そのまま問題なく飛行機は離陸。

ラスベガスからサンタフェまでのフライトはおよそ 1 時間 20 分。東京―北海道間みたいな感じ。

●レンタカーを借りるだけで「予約トラブル」「荷物トラブル」「駐車違反トラブル」の続出。必死に喧嘩腰で交渉

サンタフェ到着後荷物を受取り、そのままレンタカーを受け取るためレンタカーオフィスへ。

この日はとても混雑していたようで、電話予約した際も、ほとんどのレンタカー会社が予約満杯で、一番怪しいと思われた最も安い A 社に決めた。

カウンターへ行くと、受付の担当者が眉を寄せて、なにやらコンピューターと睨めっこをしている。嫌な予感。

どうやら予約が入っていなくて、ハンディキャップ専用の車が用意できていないようだ。

こちらはしっかりと予約をしていたので、なんとか用意するようアピール。

外で車が来るのを待っていたが、30 分してもレンタカーは一向にやってこない。

どうやら「ハンドコントロール（手動アクセル装置）がうまく取り付けられない」との連絡のようだ。

さんざん待たされた挙げ句、やってきた車を見てみると、いままで見たことがないような不安定な手動装置が、ひもにぶら下がる形で取り付けられていた。

「こんな不安定な手動装置ではとても運転はできません。キャンセルします。その代わり他のレンタカー会社にあたってくるからそれまでこの車はキープできますね？」と捨てゼリフをはいた。

最大手の B レンタカー会社がかろうじてハンディキャップカーを所持していた。

なんとか問題解決はしたものの、B 社の書類を記入している間に、外に止めておいた B 社のレンタカーに駐車違反のキップが。

おまけに A 社レンタカーのトランクには、私の荷物が入っているにも関わらず車庫に既に運ばれてしまっていた。

B 社のレンタカーで荷物が入っている車を探しに、数社のレンタカーの車が数多くある駐車場まで行くことになった。

「あっ、あれだ！」と車両を発見すると、なんと新規の客が乗り込もうとしているではないか。

車を止めて、急いで車いすを下ろし車いすに乗り換えて「ちょっと待ってください。トランクに私の荷物が !!」

新規の客は首をかしげながらも、トランクを開けてくれた。案の条、その中には私の荷物があった。

さて、次は、駐車違反キップの交渉。

同じ駐車場に、B 社の駐車場があったので、そこにいた係員にクレームをつけた。

B 社は「それはあなたの責任」と言い張ったが、最終的には罰金を B 社に支払わせることができた。

やっと空港を脱出 !!　サンタフェへ向かう

やっと空港を脱出。サンタフェまでは空港から一時間程。

●やっと着いたホテルでもトラブル 。ホテルを変更

サンタフェの予約したホテルに着くや否や、ここでも同じようなトラブル。

なんと泊まるはずだったハンディキャップ用の部屋に滞在している客が滞在日数を延期したので、部屋がないとのこと。ホテル側は、より高級なホテルを同じレートで紹介するからそれで勘弁してくれと。

レンタカー会社のいざこざで疲れていた私は、確実に、問題なくとにかく泊まれるところを紹介して、と訴えることで精一杯。 興奮した気持ちを抑えるため、ホテル内にあるトイレに行き一服する。ここでやっと冷静になれた。

フロントの担当者も代わりのホテルは、いいホテルだと言っていた。

●車いすで散策中、思い切り真横に転び落下。

変更先のホテルに行くとこれが結構いい。

しかしながら、心情としては、「もうどうでもいい」という感じでチェックイン。

部屋で一休みした後にホテルの周辺を車いすで散策する。

街自体が古いせいか、歩道がガタガタ。

スロープも少なく、おまけに思考能力が低下していた私は、ちょっと高めの段差を、無理して下りようとした。

サンタフェを散策

そしたら、思いきり真横に転び、車いすから落下。久しぶりだった。

近辺を走っていた車の人たちみんなが、わざわざ車を止め、ダッシュで駆け寄ってくれた。

体を支え車いすに戻してくれた。

次々にみんなが「だいじょうぶか」とか「この道を渡るのか」とかいろいろ声をかけてくれた。

トラブルに見舞われていた一日だったことに加え、転ぶとは今日は絶対についてないな、と転んだ瞬間かなりのショックを受けていた自分にとって、こうした親切はジ〜ンと心にしみた出来事だった。

●最後はフラメンコの生演奏で蘇る !!

とりあえずホテルに戻って体の傷をチェック。少し休憩を取ることにした。こういうときは、下手に動かない方がいい。

バーで一日の疲れを癒す

夜になり、気分転換にでもと、夕飯を食べに出る。

現地雑誌で見つけたイタリアンレストランへ行く予定が、勘違いして違う店に入ってしまった。

そこで、黒ゴマがいっぱいかかったサーモンをワインとともに食べ、その後、バーに移り、マルガリータを注文。

その店には、フラメンコを生演奏でプレイする弾き語りがいた。

カクテルの酔いも手伝い、熱い時間がフラメンコのミュージックとダンスとともに過ぎ去り、一日の疲

れがここで全て消化された。

今日一日はレンタカー予約トラブル、荷物トラブル、駐車違反トラブル、ホテル予約トラブル、車いす転倒と 5 連続トラブル。

しかし、最後は感動的なフラメンコの生演奏と酒で締めくくることができた。

二日目は初日に比べられないくらい、ゆっくりとした時間を過ごせた。

午前中は徒歩でギャラリーや、クラフトが並んでいる通りをゆっくりと散策。

昼食をその通り沿いにあるイタリアンのお店でシーフードパスタを半分にしてもらい、それでもう満腹。そして安い。午後はダウンタウンで車を駐車場に止め、街の中を車いすで散策する。

やっぱり、街並みが古いせいか、店の中に段差があって入れないところがあったりしたが、それはそれで古い街を維持しようという結果なのかもしれない。

夕方、少し疲れてきたのでホテルに戻り、夕食まで少し仮眠。

その晩は昼食をとったレストランでピザを食べた。

自分でトッピングを選び、あまりよくわからなくて、適当に注文したところ、ちょっとしょっぱくなってしまったが、その分軽めのビールが合い、十分に満足な夕食だった。

ホテルに戻り、暖炉のあるラウンジでソファーに腰掛け、ここでもマルガリータを注文。

もともとニューメキシコにはメキシコ系の人種が多い。

また、マルガリータも元はメキシコからのものであるため、あるレストランでは 40 種類以上もあるとか。

●私の荷物が見あたらない

翌朝、起きてみたら晩のうちに少し雪が降ったようで、ホテルの庭には雪が積もっていた。

「不思議な階段」があるという教会に行き、その後、お土産屋に立ち寄り、早めではあったが、空港に向かう。

早い便があればそれに切り替えようと思っていたが、どうやらそういったフライトは無いらしく、かといって、レンタカーを返してしまった後では動きが取れるわけでもない。

疲れていることだし、ゆっくり本でも読もう、と空港のラウンジの窓際に座り、ぼんやりと本を読むことにした。

多少、フライトの時間が遅れたが、ラスベガスに無事到着。ここまではすんなり済んだ。

しかし、そうは楽に帰してくれなかった。私の荷物が見あたらない。荷物の紛失。

また帰るまでに何か、もう一つぐらいトラブルがあるんじゃないかとたかをくくっていたので、もうそんなに驚きはしなかったが、航空会社のオフィスに行き、紛失用の届出用紙に名前などを書いて、そそくさと家路についた。

その後、一時間後に「見つかった」と電話があった。

その電話口で、「今夜中に届けてくれ」と頼んだが、12 時をまわっても来ない。

「きっと明日の朝かな」とあきらめて寝ることにした。そこに「ガンガンガン」とノック。

ベッドから出ていくと、宅配員が立っていた。

「遅いんだよねぇ」となげき、バッグを見ると埃が付きまくっていた。恐らく、どこかに落ちていたのだ。

そんなこんなの旅だった。

アリゾナで車いすでの乗馬体験記

＜マサ 記＞

●面白バリアフリー情報との出会い

以前、障害者の旅行に関する団体などを調べているときに、たまたま見つけたホームページがあった。Access Able Travel Source―彼らは、高齢者や障害を持つ者が旅をする際必要となる、バリアフリーに関連する情報をホームページや、メールを通じて発信していた。Access Able Travel Source の中心的な運営をするのはビルとキャロルの２人。奥さんであるキャロルは車いすを使用しているが、旅が大好きで、ご夫婦で旅に出かけることが多く、その過程で、障害のある者や高齢者に対応した情報が不足していることに気づき、自ら活動を始めたのである。

ある日、そのキャロルから電話があり、「アリゾナにバリアフリーで、乗馬が体験できる牧場ができたの。あなたの家からも近いし、宿泊施設もあってとても興味深い施設だから試しに行ってみて感想を聞かせてくれない？」というメールをもらった。乗馬などなかなか体験する機会がないだろうし、せっかくのチャンス、と思って訪ねてみることにした。

●バリアフリーで乗馬体験できる牧場へ

その乗馬ができる牧場は、当時、私が住んでいたアパートから車で３、４時間ぐらいのところにあるアリゾナ州にあった。念のため、アパートを出発する前に牧場に電話をして詳細な情報を聞いておくことにした。「何かガソリンスタンドとか、グローサリーストアといった目印になるものはありますか？」と尋ねたところ、「ハイウェイの○○番の出口を下りたら、後は道なりだよ。これといった目印はないけど、なんとかなるよ。」と牧場のオーナーからの返事。なかなか現地のイメージがつきにくい返事であったが、とりあえず出かけることに。

ハイウェイを延々と走ること３時間、指定された出口が近づいてきた。しかし、左右に広がる風景は砂漠の上に草がときおり生えているぐらい。

指定された出口周辺の写真。
ほんとにこんなところに牧場があるのか？

本当にこんなところに牧場なんかあるのだろうか、と思ってしまうほど何もない。ただ、車が走った形跡のある道が砂漠の方へと続いている。これでは、道を間違えようにも間違えることができない。とりあえず進むしかないし、指示通りのハイウェイの出口を出たわけだから、この先にその牧場は必ず存在するにちがいない、そんな気持ちのまま車を進めることに。延々と続くその道は、きれいに舗装されていなかったので、スピードを落としながら前進した。ところが、進んでも進んでも延々と同じ景色が続くだけで、ほんとに何もない。家も、人も、建物も目印も何もないのである。あるのは、延々と続く道、そしてその両側に生息するわずかなブッシュや雑草。果たしてこんなところに人が住めるのだろうか？ついつい車の燃料系を気にしてしまうくらい何もないのだ。

●牧場設立のきっかけは、娘さんの車いすから

ハイウェイを下りて１時間くらい走ったころ、遠くの方にいくつかの家らしきものが見え始めた。

どうやら、ここが私の目指したStage Coach Trails Guest Ranchだったのだ。到着し、車のエンジンを止めると、牧場の周囲には何もないためか、聞こえてくるのは風の音や、馬の鼻息だけ。家の中からオーナーの奥さんが出迎えてくれた。この牧場には、オーナーご夫婦、その娘さん、オーナーの親戚、そして数匹の犬たちが一緒に暮らしていた。

やっと目的地に着いた。
Stage Coach Trails Guest Ranch

彼らはウィスコンシン州からここアリゾナでこの施設を開くために引っ越してきたとのこと。

オーナーによれば、オーナーの娘さんは車いすを使用しており、いつか、このように車いすを利用する者でも訪れることができ、乗馬などが体験できる牧場をつくりたいと思っていた。それがそもそもの牧場設立のきっかけだったとのこと。

Stage Coach Trails Guest Ranch
のオーナーたちが暖かく出迎えてくれた

私が到着したのは午後 1 時頃だったのだが、オーナーの奥さんがランチをごちそうしてくれるとのことだったので、建物内のダイニングルームに案内された。食事の担当は、オーナーの親戚の方で、本格的なビュッフェ方式のランチはとてもおいしかった。この牧場では、このようにして、ここに住む各自がそれぞれの長所を生かして分業しながら、この牧場の運営を維持している様子であった。

●驚いた !!

全米版の旅行雑誌に私が載っていた

食後も、牧場の皆さん達と話をしていると、ある全米版の旅行雑誌を紹介していただいた。どうやら、彼らの牧場のことが、アクセシブル情報とともに紹介されているようだ。

続いて、ページをめくると、数ヶ月前雑誌のモデルを引き受けた自分の写真が載っていた。

以前、キャロルから紹介されて、雑誌のモデルを引き受けていたのだった。

そこでの写真がいつ掲載されるかは連絡してくれるとのことだったが、どうやらその知らせは私の元には届いていなかったのである。牧場のみんなは驚いていたが、一番驚いたのは私であった。

全米版の旅行雑誌

自分の写真が掲載されて驚き！

2} **Hit the Trail at an Accessible Dude Ranch.** You can be one of the first guests at Stagecoach Trails, a barrier-free guest ranch that just opened its gates in November. Owners Dan and Carrie Rynders, whose daughter is disabled, offer a range of riding programs designed to suit the needs of any disabled traveler, from ring riding to trail riding. Rates for a week's stay range from $900 to $1,250 and include meals, riding, and a heated pool and hot tub. Contact Stagecoach Trails Guest Ranch, Doc Holliday Road, Yucca, AZ 86438, tel. 520/854-1869, Web site www.stagecoachtrailsranch.com.

牧場のことが紹介されている

●びっくり !!

施設づくりはオーナーたちの手作り

ランチの後、オーナーと話をしていて感心したのは、この敷地内にある、あらゆる建物などは、彼ら自身が材料などを買いつけ完成させたということだ。もちろん業者の手を借りたところもあったとのことだが、それにしても、これだけのものを素人が手がけて完成させてしまうとは、ただただ感心してしまう。また、アメリカで障害者の権利を保護する ADA 法（American with Disabilities Act）の基準に対応するために、ADA 用の建築ガイドブックを取り寄せて、それを参考に建築したとのことだった。ADA の基準を満たすには、大変な苦労や努力が必要だったと語っていた。

この施設には、乗馬だけでなく、その他、いろいろなアクティビティーが楽しめるようになっている。その一つがプール。どうやってここまで水を引いているかと聞いてみると、なんと井戸を掘ってそこから引いているとのことだ。また、周辺を走行できる 4 輪バギーなども体験することができる。

夜などは出かけようもないが、一体どう過ごしているのか尋ねたところ、何もしたくなければそれでいいし、また、庭に出て皆でバーベキューをしたり、キャンプファイヤーをしながら歌を歌ったりもするんだ、と言っていた。

●生まれて初めての乗馬体験

外に案内され、四輪バギーが保管されている倉庫や、この牧場にいる馬などを見せてくれた。その後、実際に乗馬体験をするサークルがあるところへ案内され、まずはオーナーの娘さんが乗馬する様子を見させてもらった。

車いすから乗馬するときに必要とする器具もオーナーの手作りでオリジナル。左側にあるスロープで上まで上り、そこで馬へと乗り換える。その際、オーナーが補助をしてくれる。

その後、牧場を散歩していると、「乗馬を体験してみないか？」と誘われた。もちろん申し出を受けたが、馬に乗るのはこのときが生まれて初めて。

乗馬するために作られた特別のスロープを登り、馬の背中の高さまで行く。

このスロープで上まで行き、車いすの人でも乗馬を楽しむことができる

そして、馬に乗り込む時は、オーナーが担いでくれ、馬の背中にまたがる。乗馬しているときは、馬の両側に人がついてくれるので安心だ。実際に、馬の背中に乗ってみると、これが結構高い。馬はゆっくりと歩いてくれたので安心して乗馬することができた。

初めての乗馬。
馬の背中に乗ってみると目線が高かった。

乗馬を体験させてもらった後、今度は宿泊する施設を案内してもらった。食事や団欒をするメインのクラブハウスと、実際に宿泊する施設とは別棟になっていて、家族などの多人数が宿泊できるところから、二人用の部屋と、いくつかの種類に分けられている。私が訪れた時は、まだオープンして間もない頃だったので、オーナーから、車いすの視点から見て何か改善してほしいところがないかなども聞かれた。基準（ADA）に従って作るだけでなく、よりよい施設を作っていこうとするオーナーの熱心な気持ちが伝わってきた。

●帰途。星空のもとやすらぎの自然を満喫

今回は、この牧場の視察のみが目的だったため、その日は宿泊せずにそのまま帰宅することとした。帰る頃は、すでにあたりは暗くなりはじめ、高速道路の近くまで行った頃にはすっかり日も落ちていた。私は、車を一度停め、ギアをパーキングに入れ、ライトのスイッチを消し、エンジンキーを停止させた。あたりは静粛な空間に包まれ、空には幾千もの星が広がっていた。都会の喧騒や日常の生活に疲れたとき、また、静かな空間でゆっくりしたいとき、そんな時に訪れたい、そんな場所であった。

Stage Coach Trails Guest Ranch 牧場のホームページ

http://www.stagecoachtrailsranch.com/

※ Features for disabled のページに、マサさんが乗馬する際、ご主人に抱えられている写真が掲載されていました。（現在は掲載されていません）

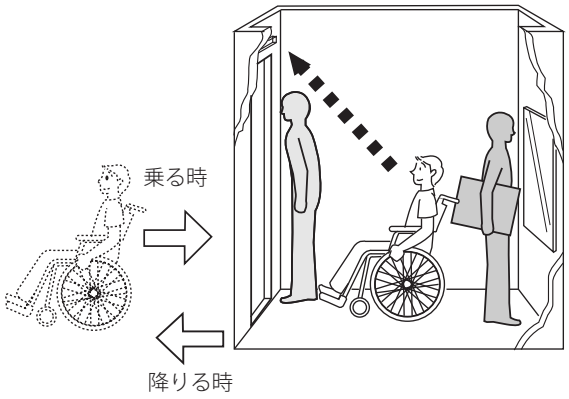
アメリカでは「バックから乗れ‼」と誘導してくれました。
「何故だと思いますか？」 ＜マサ 談＞

以前聞いて気になっていた話（P.4 Q6 参照）を詳しくマサに聞いてみました。

アメリカのショッピングモールでの出来事でした。エレベータに乗り込もうとした時です。一緒に乗り込もうとした男性に「バックから乗り込んだほうがいいですよ」と声をかけられました。そう言われてバックで乗り込んでみたのです。このおかげで、前進でスムーズに降りることができたのでした。
混雑したエレベータ内に前向きで乗ってしまうと、エレベータ内でUターンができなくなってしまったり、いくつかの問題が起こります。先ほどの例では、乗り込む時に私の後ろにベビーカーを押したお母さんが２組もいたのです。
乗った時、ドアに向かって降りるのを待ちますが、それは当然、降りやすいからなのです。

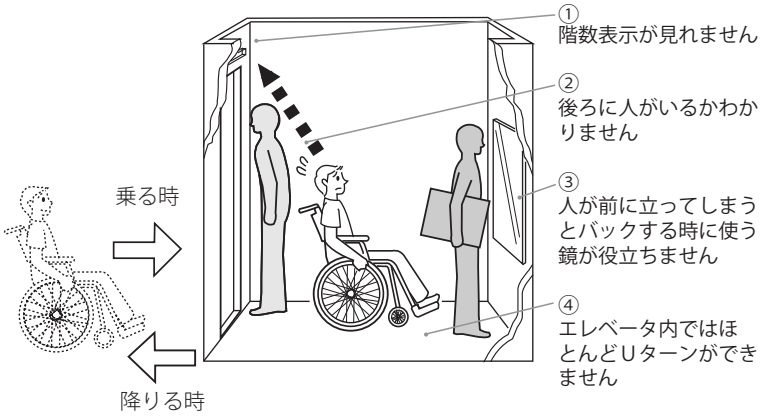
ついつい乗り込みやすさから前進で乗り込むことが多いのですが、後ろから人が乗り込んできたりするとUターンができないことが多々あるのです。

後ろから乗れたらあとはラクラク‼



アメリカでは「バックから乗れ‼」と誘導してくれました

前から乗った時、問題があるのです



略歴

鈴木 雅彦（通称 / マサ）：
高校２年次に、手術中の医療ミスにより、下半身不髄（L1）となる。1992 年、１年半の入院を経て在学中であった高校へ復学し、１年後に卒業。その後、多摩大学経営情報学部に入学。卒業後、渡米し、「老年学」（Gerontology）のプログラムを大学にて専攻。米国各地にて関連セミナーなどに参加。2001 年帰国後、多摩大学ソシオ・ビジネス研究会に所属。

P.4 の答え

A1. ４輪
A2. 車いすが内部でUターンできるスペースをとっている。
A3. アクセルとブレーキのペダルを手で操作する装置が付いており、片手でハンドル操作できるよう、ハンドルにノブが付いた車がある。
　乗降は、車いすを車に並行に近づけ、座ったまま座席に乗り移る。その後、車いすを折りたたみ、車いすを収納する。
A4. エレベータ内で車いすが回転できない際、後ろ向きに出られるよう後方を確認するため。
A5. バリアフリー：建築設計において段差や仕切りをなくすなど、高齢者や障害者に配慮すること。
　ユニバーサルデザイン：障害者、高齢者、健常者の区別なしに全ての人が使いやすいように、製品、建物、環境などをデザインすること。
A6. 上図参照

いすの上にも 3 年――――――――
当初は恐怖の連続でしたが、
最近は花を楽しめるようになりました

<山田 福壽 記>

車いす生活、はじめの頃はひとりで街中に出かけることはスリルとサスペンスの連続でした。

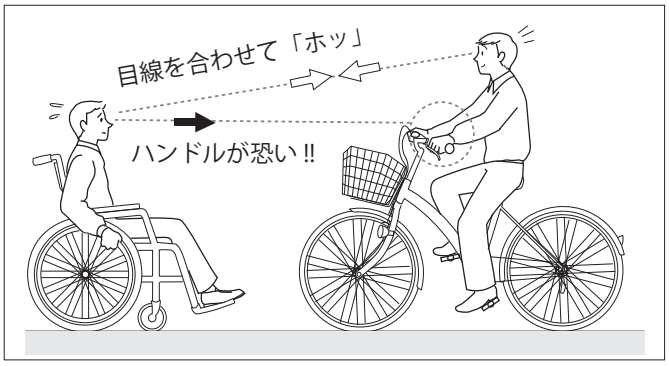
車いすの視点から見ると、健常者の頃にはまるで感じなかった事がこれほどまで恐い事なんだと感じる事が多く、例えば向かってくる自転車のハンドルが異常に眼に近づいて、とても恐い思いをしました。

車いすに乗っていると、とっさに機敏な動作が出来ないので自分では避けられないと思うと、相手の注意力に頼るという事がどんなにか恐ろしい事で、凍りついたように目をつぶって通り過ぎるのを待つ事もしばしばでした。

自転車の方は、向かいから来る車いす生活者に目線を一度合わせていただければと思います。そうすれば我々車いす生活者は相手が自分を認識したと分かり、必ず避けてもらえると安心感がもてて助かるのです。

車いすは屋内の床を走るぶんにはスムーズで乗り心地も良いのですが、ひとたび外に出ると、歩道のデコボコによる 1 ～ 2 センチの段差が体に直接響いてくるので、見た目よりかなり苦痛です。

買い物でお店に入るとき入口に 3 センチぐらいの段差があると助走をつけても通れないことが多く、入口で止まってしまいます。



もしお店の入口で止まっている車いす生活者がいたら、ひと声かけて押してもらえれば大変助かります。出入口では、こちらから声をかけづらい事があるのです。また、車いすは立っている人から見ると高さがないので目に入りにくい事があります。

私は車を運転する事が多いのですが、車いすマークのある駐車スペースに健常者の車や自転車が停められていて使用出来ない事がたくさんあります。車いすマークのある場所は、車いす生活者が動きやすいように配置されたところですので、思い出していただけたらと思います。

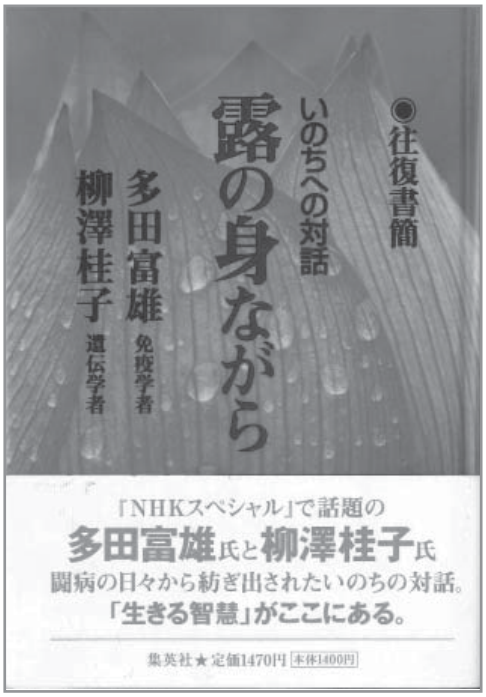
車いす生活も 3 年目に入るとだいぶ余裕がでてきます。そのため、周りの風景を見ることが出来るようになりました。そして気がついたことは道路の生垣や民家の良く手入れされた花壇などをとても近くで見れる事です。思いがけないお花見を楽しめます。このような時は、車いす生活も悪くないと思え、これから続く座って生きる人生も苦とは思わず普通に生きられそうだと思えてきます。何事にも慣れる事が大切だとつくづく思えてきます。

略歴

山田　福壽（ヤマダ　フクジュ）：

1946 年東京都生まれ。1981 年、海外商品の日本企業へ販売代行の会社アンクル創業。52 歳で脊椎硬膜外血腫を患い、下半身不随となる。現在、障害者による障害者と介護者のための講演、本を執筆、出版のため活動中。

いのちへの対話『露の身ながら』



往復書簡　いのちへの対話
『露の身ながら』
多田 富雄 (著), 柳澤 桂子 (著)
集英社発行　￥1,470（税込）

●「どんなに不便でも見苦しくても、どこへでも出て行く」

＜多田 富雄（免疫学者）＞

『半身不随になる前は気がつかなかった事ですが、日本の公共施設は障害者に不親切といわざるを得ません。歩道は段差が解消されていないので、車椅子では危険です。タクシーにも乗りにくい。タクシーをせっかくとめたのに乗れないこともあります。裏の道は白線を引いただけの歩道ですから、乗り上げて駐車されていたりすると、ぐるりと遠回りしなければならない。

私は、今地下鉄の湯島駅のすぐそばに住んでいるのですが、道から入れるエレベーターが一基もないので利用することが出来ません。障害者のトイレは、駅やデパートでも少ないし、ちょっとした段差があれば目の前にあっても入れない。町に障害者の姿を見かけないのは、障害者が少ないのではなく、福祉の眼が行き届いていないからです。

この間、国立第二劇場の中劇場にバレエを観に行きましたが、急な階段座席で車椅子はもちろん入れられない。人の手にすがって、文字通り命がけで席にたどり着きました。帰るのがまた大変。登りついたときは、全身に冷や汗が出ていました。

能楽堂で障害者用のトイレがあるのは、国立能楽堂だけです。中には高い階段の上に能楽堂を建てて、手すりすらないのもあります。何しろＮＨＫホールでさえ障害者に対する配慮がない。これでは文化国家とは義理でもいえません。車椅子の観客が外国より少ないのはそのためです。

それに日本の車椅子自体も未完成です。長く座っていると腰が痛くなる。片足でこぐのには重過ぎる。シートももっとよい工夫があるはずです。私のように、自分でこいで歩くと体がずれてしまうし、ストッパーやフットレストも使いにくいのしかない。これだけエレクトロニクスが進んでいるのだから、もっと合理的に出来るはずだといつも思います。

私が一番困ることは、組み立て式の一番進んだとされる車椅子でも、タクシーのトランクに収納するのが難しいことです。付属品を全部取り去っても、あと二、三センチという所で引っかかってしまう。また日本のタクシーのトランクは、燃料のタンクがあって狭いのです。電動車椅子に踏み切れないのはそのためもあるのです。こうして障害者は行動範囲が制限されてしまうのです。

でも私はどんなに大変でも外出をやめません。病院に行っても、私の障害は重い方で特別のケアーを必要としていますし、言葉は全くしゃべれません。危険があっても、助けを呼ぶことが出来ない。

なのに、私の行動範囲は普通の人に引けを取りません。それは好奇心が強いからだけではなく、一種自分の弱さとの闘いだと思っているからです。介護用品に頼らないでも、何とか人間らしく生きたい、そう思って不便に耐えているのです。

私の障害は重度ですが運動麻痺だけです。右半身は全く動かない。でも考えることは出来ます。知力の点では、普通の人と全く変わりない。

喉も筋肉の重度の麻痺です。嚥下ができなくて水さえも飲めないし、声も出ない。でも人格に変化があるわけではない。大脳半球のウェルニッケの言語野は、日本語の部位だけでなく、英語やイタリア語の部位も、生き残ったらしい。単に運動機能障害が強いだけなのだ。そう気づいたとき、おおげさに言えばある種の覚悟が生まれました。そして、障害と闘う気持ちが出来たのです。

だからどんなに不便でも、妻に頼ってどこへでも出て行くつもりです。涎を垂らしたり、言葉で答えられなかったり、転びやすかったりして、見苦しいかもしれないが仕方がありません。

介護用品にあまり頼りたくないのも、そのためなのです。不便がなくなると甘えてしまい、日常の闘いの気力がくじけてしまうのです。自分を甘やかせてしまうのが怖いのです。

私は運動機能の麻痺だけですからこんなことを言えるのですが、痛みや苦しみがあるのでは、耐えることだけで気力が削がれてしまうのでしょう。でも、柳澤さんの今度のお手紙は、強靭な精神力を感じさせ、とても病床にあって書かれたものとは思えません。元気付けられます。』

（多田 富雄氏の文より抜粋）

略歴

多田　富雄（タダ　トミオ）：

1934 年生まれ。東京大学名誉教授。免疫学者。文化功労者。国際的な学者として多忙の日々を送っていた 2001 年 5 月、脳梗塞で倒れ声を失い右半身不随となる。現在リハビリを行いながら、パソコンに向かい左手で著作活動を続ける。

●「車椅子に乗るときはおしゃれをして乗ります」

＜柳澤 桂子（遺伝学者）＞

『私は、車椅子でしか出歩けませんが、恥ずかしいと思う気持ち、夫に押してもらうことの辛さは、今では、ほとんど消えました。

これはとてもおかしいことだと思うのですが、男の人が車椅子に乗って、女が押すのは、美しい行為なのです。ところが女が車椅子に乗って、夫に押させるのは醜い行為なのです。どれだけの人がそう感じるのかわかりませんが、少なくとも私はそう感じておりました。先生にはきっと、おわかりにならないでしょうね。

先生は一生懸命闘病なさって、奥様やお嬢様から優しく介護されていらっしゃる。それは美しいのです。けれども、主婦が病気になって、夫に家事をさせ、介護までしてもらうのは、恥ずべきことなのです。

これは私にとって理屈ではありません。母は私に徹底して男尊女卑の教育を致しました。ですから私はそれから、今も抜け出せないのです。少しずつよくなってはいますが、病気になった時、この母の呪縛が私をとても苦しめました。

かつて、母が私にいったことがあります。「今日、外を歩いていたら、おばあさんが車椅子に乗って、おじいさんが押していたのよ。哀れでいやだわね」
大家族で暮らしていた時には、男が車椅子を押さないですんだかもしれません。でも、今はそうはいかないのです。夫は車椅子を押すことになれてきて、恥ずかしがらずに押してくれます。息子も進んで押してくれます。ほんとうにありがたいことだと思っています。

私は車椅子に乗る時はおしゃれをして乗ります。長いスカートをはいて、ネックレスをつけ、イヤリングをつけて座ります。そうすることで、少しでも車椅子の暗いイメージを薄くしたいと思います。

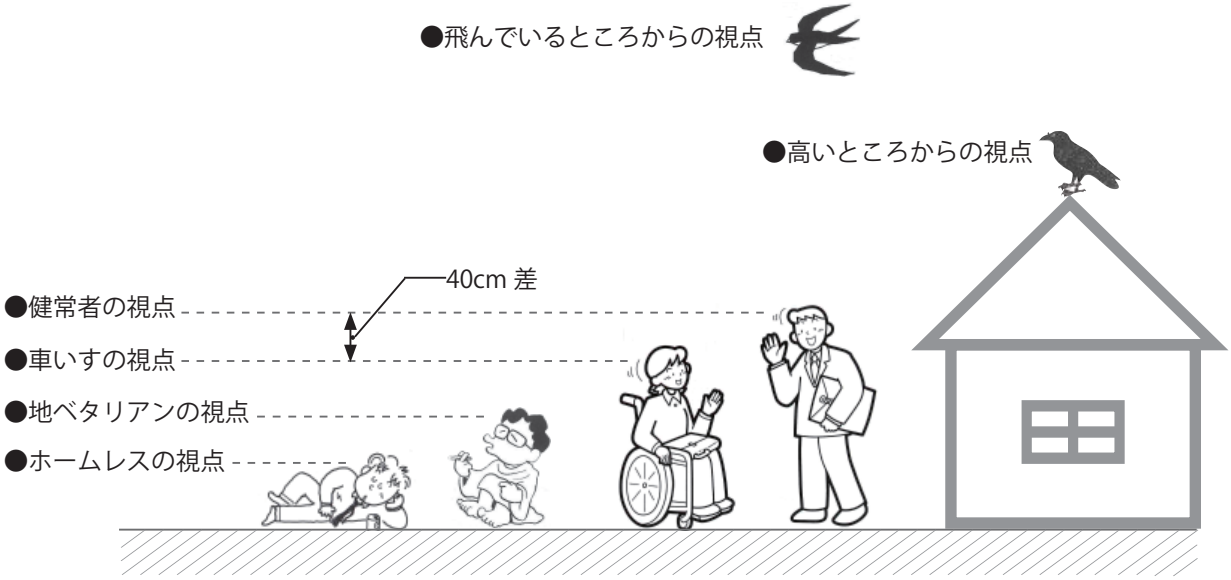
この間、私は、お風呂でおぼれて、いやというほどお湯を飲みました。それで、今度、お風呂に手すりをつけることにしました。私には、ものにつかまるというとっさの動作ができないのです。そろそろ家の中の段差もなくして、家の中でも車椅子を使うことを考えなければならないと思っています。今はまだ、家の中は歩いていますが。』

（柳澤 桂子氏の文より抜粋）

略歴

柳澤　桂子（ヤナギサワ　ケイコ）：

1938 年生まれ。お茶の水女子大学名誉博士。遺伝学者。サイエンスライター。世界に先駆けて *T* 遺伝子の研究をしていた 1969 年、原因不明の難病が発病して研究活動を断念。激痛と闘いながら病床から、生命科学の啓蒙書を通じ「いのちの大切さ」を一般読者に訴え続ける。



車いすの視点から何を学ぶか？

＜小宮山 記＞

ものごとをどの位置から見るか？が視点である。

それにより人生観または動物観が違うと思う。

まず動物の視点はどうか？猫や犬は、いつも人間を低いところから見上げている。

彼らからすれば人間は恐いものであり、猫のように甘えてしまうか、犬のように忠誠を誓った方がうまく生きられると感じているのではないか。

他の動物はどうか。朝のカラスの食事風景を眺めてみた。ゴミ袋をつつき、おいしい肉類を引っ張り出す。そこで食べることもあれば、これを高いところへ運び、人間を観察しながら食べている。

カラスの視点からすれば、いくら一部の地域でゴミ袋対策をしても関係ない。石原知事が、いくら東京だけでカラス対策をしても国会が強制的に決めなくてはならぬかも知れぬ。

カラスは人間や餌のありかを、瞬時に上空から見たり近づいてみたりしているのである。犬猫や我々人間とは全く違う能力を持っていると思う。

では、私たち人間、日本人の視点はどうか。

昔は少しでも高いところからの視点を求めてきた。二昔前は下駄の時代があった。思春期の男達は高歯を履いて、少しでも高い視点を求めた。

また、今は少し影を潜めたが、高度成長時代になると今度は女が「厚底靴」を履き、少しでも高い視点を求めた。

最近では世の中落ち着いて来たせいか、若者たちが「地ベタリアン」となってより低い視点から社会を眺めるようになった。

当初は不潔に見えたが、これは良いことかも知れぬ。またさらに低い位置で寝ているところからの視点はどうだろうか？

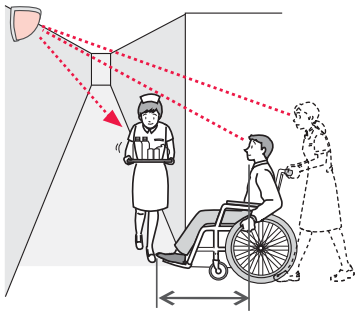
いつも通るところに寝ているホームレスから私たちへの視点である。管理社会で忙しく、疲れている人間をよく見ているのかも知れぬ。

私たち日本人は島国で同一言語である。普通ほとんど同じ視点からしかものを見ることができない。

たまには車椅子に乗り、その視点から見ると見えなかったものが見えてくるかも知れぬ。しかし今、その勇気や機会がない。

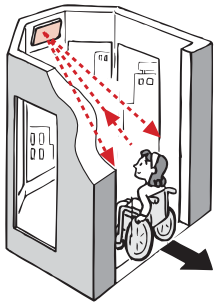
コミーのミラーは

こんなところでお役に立っています

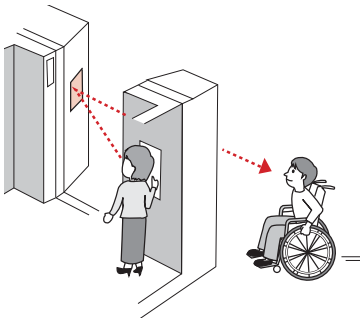


◀足元注意
出合い頭の
衝突予防に !!

出っ張っている

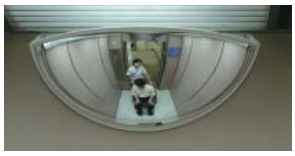


シースルー
エレベータの▶
車いす用に !!



◀乗り残し
挟み込み防止に !!

USER'S REPORT



HD50EV

日本赤十字社医療センター

車いす、前向きで入っても安心です !!

「車いすの方をサポートしてエレベータに乗り込む時は通常、バックで入ります。でも混んでいる時は、他の患者さんを待たせると申し訳ないので、前向きで乗り込んでしまい後で苦労していました。
このミラーのおかげで、エレベータから出る時に、振り向かないで後方を確認できるのでとても助かります」

日本赤十字社医療センター 様

死角を生かす気くばりミラー

身近なコンビニから航空機まで、コミーのミラーは、
安全・防犯・サービス・効率アップに役立っています。

オーバル

ラミドーム
2008 年度グッドデザイン賞受賞

FF ミラー EVE

FF ミラー AIR

FF ミラー ATM

FF ミラー 車出口

Komy®

コミー株式会社

〒332-0034　埼玉県川口市並木 1-5-13
□代表（営業本部など）　TEL：048-250-5311
□受注センター　TEL：048-250-5317

コミー　検索

FAX：048-250-5318（共通です）

お客様相談室 0120-531-073